

## 平成 19 年度日本光学会総会

平成 19 年度総会は、2008 年 3 月 28 日(金)に日本大学理工学部船橋キャンパスにおいて開催された。

まず、伊東一良幹事長より挨拶に代えて、日本光学会の今年度の動きの概要について説明があり、その後、津村徳道庶務幹事、石橋爾子会計幹事、菅谷綾子会計幹事から、平成 19 年度の本会の主な活動の報告と次年度の計画が説明された。また、約 3 年間光学会の事務を担当され、2008 年 4 月末に退職される酒井 美弥子さんに、幹事長から感謝の言葉が贈られた。5 月からは、新任の池田美穂子さんが光学会の事務を引き継ぐ。

本会は、光学に関する研究の推進および技術の向上をはかるという比較的恒久的な目的を持っているが、一方で機関誌や学術誌の発行、学術講演会の開催などを介して、急激に変化する現代社会と密に接している。このため、常に改革が求められる。平成 19 年度は、Web 広告の検討をはじめ、幾つかの小規模な改革が進められた。担当幹事の方々の熱心な取り組みの結果、年度末近くには日本光学会の「ロゴマーク」の改訂が完了し、「入会のしおり」が刷新された。会員に満足感を与える魅力的な存在であることを目指して、会員増のプランや会員制度・組織改革の検討も進行中である。

以下では、平成 19 年度の本会の主な活動を振り返る。Optics & Photonics Japan 2007 が大阪大学コンベンションセンターにおいて、「彩りと輝きとともに」と題して、11 月 26 日～28 日の 3 日間開かれた。講演件数は 317 件とほぼ例年通りであったが、参加者は合計 690 名と増加傾向にあった。OPJBP 賞セッションへの参加が 91 件と多かったことも特徴的である。国際シンポジウムとして位置づけられた日韓交流シンポジウムが同時に開催され、韓国光学会から 2 件、日本光学会から 3 件の光設計技術を中心とした講演が行われた。また、スペシャルセッションでは、国際光工学会(SPIE)会長、Brian Culshaw 博士の講演も行われ、その後の昼食会では、両学会の協力関係を記した覚書の交換と調印が行われた。

第 32 回光学シンポジウムは、7 月 5、6 日の 2 日間、東京大学生産技術研究所のコンベンションホールで、「光学システム・光学素子の設計、製作、評価を中心として」と題して開かれた。また、カラーフォーラム 2007 は、11 月 27 日～29 日の 3 日間、工学院大学で開催された。この他、北海道地区学術講演会、関西講演会、名古屋講演会、第 40 回光学 5 学会関西支部講演会、電気関係学会北陸支部連合大会などが例年通り各地区で開催された。

第 33 回冬期講習会「光診断と光治療の最前線」が、2008 年 1 月 10、11 日の 2 日間、東京大学本郷キャンパス山上会館大会議室で開かれ、光トモグラフィや分光・蛍光測定をはじめとする光診断技術や眼科・歯科・消化器外科の臨床現場に直結する光治療の新たな展開についての講演が行われた。また、第 41 回サマーセミナーが、8 月 27、28 日の 2 日間にわたって、富士教育研修所で開催された。大津元一教授(東大)の基調講演の後、光とナノスケールの世界の話題を中心に講演が行われ、恒例のナイトセッションも開かれた。サマーセミナーについては、その意義や今

後の開催方式など、基本的な議論が幹事会において続けられている。また、産学官連携委員会が企画した第3回光応用新産業創出フォーラムが、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにおいて、12月14日に開かれた。

出版関係では、「光学」第36巻第4号～第37巻第3号(計12号)が、「Optical Review」Vol. 14 No.2～Vol.15 No.1(計6号)が出版された。「Optical Review」に関しては、シュプリンガー・ジャパン株式会社との覚書が、著作権、ロイヤリティー等に関する修正の後に更新された。

本年度の光学論文賞受賞者は、高橋栄治氏(理化学研究所)と成瀬誠氏(情報通信研究機構)に、また日本光学会奨励賞は、山本和広氏(情報通信研究機構)と山口堅三氏(徳島大学)に授与された。年次学術講演会であるOPJ2007においては、Optics & Photonics Japan ベストプレゼンテーション賞が石島玲華氏(電気通信大学)、桑原光巨氏(大阪大学)、林 靖之氏(東京大学)、牧野貴雄氏(千葉大学)、南川丈 夫氏(大阪大学)の5名に授与された。

なお、日本光学会の平成19年度事業および平成19年度の計画等に関する情報は、第37巻7号の「日本光学会平成19年度年次報告」の中に詳細が公開される予定である。